

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和五十九年八月十五日 発行 (毎月一回十五日・発行)

(通第四二一號)

目次

予が信仰の経過	近角常観	(1)
近角常音先生日記抄	近角常音	(6)
近角常音先生の生涯	柳瀬留治	(10)
聖人の老い	井上善右エ門	(15)
慈光日誌抄	西元宗助	(18)
法蔵菩薩の三つの誓願	花田正夫	(20)

慈

光

第三十六卷 第八号

予が信仰の経過

近 角 常 観

私は幼い時から佛陀を礼拝し、経典を読み、又宗旨の学問の片端をもうかがいました。が、その後東大に入学しました。自分は性来慷慨するのが好きな性質であつたから、同じ学生の中で宗教のことを互に語り互に論じなど致しました。従つて色々宗教的の催もして見ました。今から十三年前、東京の高等中学時代、諸学校の生徒達と相談して、初めて仏教暑期講習会を興しました。これから青年学徒間に、宗教を求めることが始つたように思われる。それ程であるから、自分は随分熱心に仏教の爲にする積りであつた。然るに九年前即二十九年から三十年にかけて、身猶学生でありながら学事を抛擲して宗教の爲に奔走することになつて、随分心神を勞しました。全体この事件は、着手するときことによると一生涯学問を廃めて仕舞わねばならぬかも知れぬと決心した位であつた。そうして三十年二月二十日に帰京して、やれ／＼と安心したが、それから身体が無暗に疲れて、心が何となく苦しくなつて来たが、初は自分

でもその訳が解らなかつた。そうして居る中にも、朋友同志がどことなく仲の悪いのが苦になつて、どうかして人間が互に飽迄伸よくするようにしたいと思つて、右に善くし、左に順い、彼を慰め之を導き、色々出来る限りの心配をしよう、と、大奮発でやりかけて見た。ところが世の中は、どうも思うようにゆかぬ。一家の人の心持から、社会の上に至るまで、左に聴けば右に背き、甲に善くすれば乙に恨まれる。どうしても皆が一処に心がまとまらぬ。そこで他人を不足に思つて来た。人は何故かくまで勝手であるか、自分が思うように世界がいかにぬ、こう思つと益々世界が悪くなつてきた。生来自分は人に対して隔て心がなかつたに、妙に人を疑う傾が出来て、自分はこれ程までに人に親切を運ぶのに、先方は何故あのように悪くするであろうと恨んだり、人々の間柄を調和しようと思つた自分が、遂には自分から隔てたり恨んだりすることになつた。右に対しては、愈々善くない、左に向つても益々悪くなつて、果ては

世界中の人を、誰を見てもイヤになつてきた。この時の心持をば、今云おうとしてもと云えぬ位である。併しこの如き煩悶は私計りでない。かかることは世の中に大なり小なりある事柄であるから何人も自ら省れば解る事である。彼是して居るうちに、四月八日は釈尊の降誕会となつた。その前の晩に、人が翌日を楽しんで色々話をして居るのが私には少しも愉快でなかつた。このように初の間は人を善くしようとしたのが、終に自分が悪くなつて仕舞つたが、それでも自分では、世の中の者どもは如何にも不真面目である、自分は真面目で一寸の隙がないと考へて居た。こんな時には書物を読んでも、教場へ出て一向面白くない、むしろ解らない。唯々人生のことを気にして、考へてばかり居つた。こうなるとありとあらゆる悪い心は皆起つて来る。今まで仏教を喜んだのも何にもならぬ、佛様も一向有難くない、友人にも見離される、いかに愛読の書物でも一向味が無い、総てのこと何をも思つても心を慰めることは出来ない。僅かに食うたり飲んだりする上に少しばかりの味がある。そこで唯五官上に一時の樂を見出しつゝ、ある物質的の人間になつて仕舞つた。人間が苦悶にある時、兎角墮落し易いのはこの故である。決して無理はないと思つ。酒を飲んで一時の氣をまぎらし、大言壮語しては胸中の鬱を散らそうとするのは、是非もないことである。私はその

時分には事によると人を殺すことも出来たかしらんと思つた位、人を殺すことが恐ろしいばかりでない。自分が死ぬことも何ともない。現に五月二十三日の晩は、自分が死ぬかと思つた。此時の心の有様を有り体に懺悔して見るに、前には身命を賭して宗教の爲に尽そうとしたものが、頗る小成に安んじ、小さなことに眼をつけるようになつたかと思し、又前にこういう風にしたら善かつたと思つたか、と愚痴をこぼし、人が自己を疎んじ、或は悔るようになつたか、前に東京に出て来た時は、意気天を衝く有様であつたに、今のこの有様は何事ぞと悲しみ、我枕頭に佛あり聖教あり、而して何ぞ心を安んぜざる、と悲しみ、故郷の父母兄弟を思つては、自分の挙動がいかに悠々として居るやうに思われ、前には我心は天の如く大なりしに、今は何が故にかく井蛙の如くになつたか。以前は一度立てば人を動かすに足り、又同僚の間でも至誠の心を以て遇せられたに、今は人が自分を見ること土芥の如くして居るやうに邪推し、自分は宗教家でありながらこの有様は何か、と自ら責め、前に安心立命して居るかの如く人に語つたは、人に對して申訳がない、と悲しみ、終には、前にはか程迄に色々尽力したが、千仞の功を一篋に欠きたるが如く悲しんで見たり、人が親切に慰めてくれれば、その親切に對して感

謝の心が少いと、自ら責め、甚しきに至っては、人を感化すべき身分が、他人の感化を受けて何の面目があるかと云うような奇妙な考えを起し、又他人の病気に對して、以前ならば疾く行きて看病すべきに今は非常に冷淡になったかの如く考えられ、見るもの聞くもの、皆苦悶の種ならざるはなく、善きにつけ悪しきにつけて皆愚痴の材料たらぬはない有様であった。最後に自ら思うには、我臨終近づけり、我命は既に死せり、且つ精神的に人より殺されつつあるに拘わらず、猶菩提心の起らぬは何事ぞ、汝自殺せんと欲せば、須く男らしく之を行え、而して自殺して果して何れの処に往くや、かの善導大師の所謂、往くも亦死せん、還るも往まるも亦死せん、亦死せん、一種として死を免れずといえる有様であった。最後に、汝は自殺するか、若くは破天荒の事を為すか、二者その一を撰ぶべしと叫んだが、其夜の苦悶の極であった。

昨午かの藤村操という高等学校の生徒が「煩悶終に死を決す」と云うたのは、実にひどいことなのであるが、あれも決して無理ならぬことと思われる。私はその通り煩悶苦痛の人間であった。和讀に所謂「苦惱の有情」であった。悶え／＼苦しみ苦しんで、とても宅に居られなくなつて、友人の宅に逃げて往つたが、矢張り苦しくなつて堪らなから、自分の信仰は全く破れた。今迄人に信仰のことを語つ

白くもなく、諸名家の講義を聞いても一向に解らない。まるで二週間というものは、友人に苦悶を訴えて、人をいじめ通した。其時に、世の中に真実の朋友がほしい、いかなる時も我を見限らず満腹の同情を以て我を慰め我を導く友人がほしいと、しみ／＼思つた。

而して尋常中学校時代の友人で、極く親しき人があつた。これは尾張の人である。自分はこの友人の処へ行つて遇い自分の苦痛を告げたいと考へた。後に聞けば其友人が夢を見たということである。其人の寺の玄関の前に一つの大きな蘇鉄の圍りを非常の速力を以てグルグルと回つたが、やがてホカッと消えたと思つと、私が苦しい顔をして突然とあらわれてきて、疾風の如く其友人の肩を攫んで、何とも訳の分らぬことを云つて訴えた。そこで友人は、近角君ではないか、君その有様は何事だといつて慰めんとしたら、直ぐに夢がさめたということであつた。それが丁度私が松島にあつた苦悶の最中であつた。

さて私は松島の講習会を了えるや否や帰途についたが、其時は恰も黒雲の中を押し分けて行くような氣持であつた。それから東京へ帰つて一晩泊まつて、翌日直に尾張へ向つた。そして友人の寺を尋ねたら、友人が私の顔を見るなり、ア、是であつたと、無言の間に深き同情を注ぎ、大層慰めてくれた。然るに私は夢の中で遇つたと同じように、訳の解らぬことをいふて、まるで氣違ひであつたと申すこと

たのが申訳がない、自分にはどうしても安立の道がないから、時が丁度学年試験の前にさし当つたにも拘わらず、学校を廢めて座禪に出掛けようと思つた。全体私は、信仰が確な間は、試にも座禪するといふような氣がなかつた。されど従來の信仰が駄目になるや否や、学校を廢めて座禪をしようと思ひ立つた。

すると親友の一人が引き留めて、是非共学校の試験を済ませよ、君が学校廢めるならば、自分も学校を廢めて君と一処に往く、と云つて呉れた。自分故に友人まで学校を廢めさせては相濟まんと、思ひ直して友人の助を得て、学校の試験を済ませた。そして国へ歸るまでも一つ苦しいことに出遇つた。それは彼の陸前の松島に開けた佛教夏期講習会に行くべきや否やといふ一事である。この講習会は自分が發企した会合であるから、これまで一回も欠席したことがないので、この時も欠席することは非常に罪であると思つた。けれどもどうも人の中に行くのがいやである。苦しい有様を人に見られたくない、実に世の中はいやであるが、義理的に止むを得ず思ひきつて行くことにした。東京から仙台に行く汽車の中で、ただ無暗に煙草ばかり吹かして、同行の一友人を苦しめた。又松島に着いても、例年の講習会と全く氣持が別であつて、第一多数の人の顔を見るのが何よりも苦しく、天下の美を鑑めたる松島の風景も更に面

です。そこに二晩泊めて貰つて自分の家に戻つたが、イツでも喜色満面で帰家するのは大に趣を異にして居た。物を食つても黙つて居る、何を話しかけても確かり挨拶もせぬ。そこで親が叱つて見たり慰めて見たりして呉れたが、一向に効がない。八月に及んで苦悶の頂上であつた。一つの小座敷の中を足を爪立て、キリ／＼舞つて居た。此時大無量壽經の五惡段の一言々々が、皆私のことを書いてある如く感じた。「徒倚懈惰にして、肯て善を爲し身を治め業を修めず、家室眷屬飢寒困苦す。父母教誨すれば、目を瞞らして怒り鷹。言令和がず、韋戾反逆す。譬えば怨家の如し、子無きには如かず」これらの經説が、一つも他人の事とは思われなから、併しそれでもどうしても佛様を有り難く拜むことは出来ぬ。日夜に泣き悲しんで、一心不乱に佛に禱りて救われんことを求めたが、少しも何の感じもなく、泣きて涙出でぬ様な心持であつた。九月になつては、どうも腰部が痛くて帯が出来ぬ。終に「ルチュー」といふ病氣になつた。此病氣は肉の下が濃むので、非常な痛みを起す難病であつた。それでも昼の間は考へて許り居たから、左程にも感じなかつたが、夜寝ると七顛八倒の苦しみをした。私の弟が介抱をして呉れたが、私が眠ると知らず識らずヒー／＼泣き叫ぶのが、腸にこたえて恰も鋸で曳かれるようであつた。今でもそのことを思つとゾツとすると思ひます。それから長浜病院で切開して貰つ

ことになり、二週間入院しました。それ程の病氣になって苦しんで居て、一命も或は六敷しかろうと医者も申しましたが、それでも自分は死ぬということをも更に気に掛なんだ。唯自分の浅間しく罪の深いことのみを苦に病んで、どうか善い友人をほしいと許り思つて居た。病氣が少し快くなつて病院を出たときは九月の十五日である。其後十七日に初めて病院へ切り口を洗ひに行く途中、車の上で、自分は罪の塊である、実に極悪である。自分は生きて居るといふのは名前ばかりで、実はこの途中の石塊と余り変りはないと思つて、淋しく味気なく堪らなかつた。それから病院から帰り途に、車上ながら虚空を望み見た時、俄に氣が暗れて来た。これまでは心が豆粒の如く小さかつたのが、此時胸が大に開けて、白雲の間、青空の中に、吸い込まれる如く思われた。何だか嬉しくてならんで家に帰つたが、叔父が私の顔を見て、どうしたのか一時に顔が變つたと、大層喜んで呉れた。

それから私は、つく／＼と考えて、大に自分の心に解つて来た。永い間自分は眞の朋友を求めて居つたが、その理想的の朋友は佛陀であるということが解つた。人間の世の中に向つて、眞の朋友を求めたのは、誤りであつた。実に世の中というものは、此方から一寸隔てれば、先方も一寸隔てる。二寸疑えば、向うも二寸疑う。たとい表面には少しも様子を現わさずとも心の中に於て、此方より隔つれば、

近角常音先生、日記抄

昭和二十五年、六十八歳。

一月九日。

近頃歎異抄一条、二条を頂かせて貰う事頻りである。兎に角「何れの行も及び難き」我等を、それ故に、それを哀憐して捨てぬ大悲と、この不思議にあい奉つた現実の不思議が有難い。

一月十日。

予は元旦以来、聖人の帰洛後の隱遁的御生活や「教信沙彌の定云々」のお言葉などを思い出して悦に入つていたが今朝は「そのありがたいものがあるならば、それを人にも分たねばならぬではないか」と考え出し、更に大いに慚愧した。

一月十五日。講話。

此方より隔てただけそれだけ、向うも隔てて来る。此の如く人の心は感應するものである。而して善い人間と、悪い人間と交際して居るときは、善い方に引き附けるか、悪い方に引き附けるか、どちらかである。然るに善い方は悪い方に必ず負けて仕舞う。初め一度二度は我慢して、人を善くせんと考えても、凡夫同志では、自分が他人を善くすることも出来ねば、他人が此方を善くすることも出来ぬ。唯互に悪い方へ／＼と引き落し合つて居る許りである。然るに佛陀は、此方が悪ければ悪い程、いぢらしく思つて下さる。此方が隔てれば隔てるほど、佛陀は胸を開いて迎えて下さる。此方が悪く思えば思う程、いよ／＼善く遇して下さい。こういう御方が在しますということ知らずに、今まで心を苦しめて居たのは浅間しい。佛陀々と云つて居りましたが、佛陀は我が為の眞の朋友であるといふことは、一向に氣付かなんだ。然るにかように、我が眞の朋友は佛陀であることを、ひしと我胸に感じ來つてからは、日に増して有り難く感ぜられて、十月に入つては、人に対して懺悔話をして、佛の慈悲を有り難く喜ばせて貰うことになりました。此時の感じを三十二年の始めに『静観録』に表白したのが、彼の『信仰の余瀝』の最初の、宗教的同朋の一章であります。

『懺悔録』より

歎異抄一条「彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなり」について、自分の氣づかせて頂いた時の信味を話す。

亡兄の「善」で行きあたつた苦しみをよく聞いて貰おうと努め、最後に攝取に言及し、我ながら今春元旦には一条を頂いて攝取不捨のお示しにびっくりした次第を語つて、攝取不捨を経由せずして救いに預かれる人は一人もない事を明了にしたのであつた。

一月二十日。

某君の話もよいが、何処か仕事氣がある処がすこしびつたりせぬ。信仰だけは純一無雜に取扱わなくては意味がないであらう。

一月二十九日。

お慈悲を仰ぐ時には、予は全く無条件にて頭が下る。人間の罪惡に対しては全く如来の大悲でなくては道のないことが明らかに見えわたるからである。これは幸に予は他ならぬ亡兄によつて知らされたからであるが、その縁を持たない人は、ただ如来の呼び声ときいても、自分と直接の關係についてはつきり知らされまい。要するに「汝自身の問題である」と呼びかけ、指摘して下さいその人の矜哀の間

題なのではなからうか。

一月三十日。

勤行後の話。予としてはやはり亡兄の言をきいて驚駭したことを云わずにはおれぬ。驚駭したからそれが問題となつて感謝の情がしみ渡つたものであろう。そうしてそれが御縁となつて、真の真実には半点の注文もあるものではない事が初めて明らかになつてきた。

それならば、それ程注文のつけようもない自分であるかと考えて、初めて自分の全暗黒性がここに極めて明了になつてきた。

殊にこの煩惱具足の身で如来大悲に齒を立てようとしていた。そのたわいなさに気がついた時は、今までの「あるの、無いの」の頭を捨てて、ただ大悲の忝けなさに感激する外なかつたのである。

同時に、このような桁はずれの罪業の身には、成程この誓願不思議でなくては救つて頂けないわけが分つて、ここに佛を無視するわけにゆかぬようになったのがわが信心の経過であつた。

なほ二河白道の勅命の話もしてしまつた。

この世に明らかに仏教は存在する。佛教はただこの誓願一仏乗と呼びつけている。この呼び声一つが即ち大悲そ

悟

のものである。

二月一日。

予は人生々活に於て、真のものは念仏申す外に一物もないと信じている。同時にお慈悲に救われて人間は真実の道を進めるのだと考えている。でも後者の方はそう立派には言いきれぬ。むしろ自分としては徹到徹尾泥田の中にふみかぶりながら、時々日輪の光に照破されて、真実の佛を見せて頂いていると言つた方がよいのかもしれない。

二月二日。

某君に二時間ほど自分ながら本気に話した。殊に話が、「信界建現」から始つたので、予も今更ながら「建現」の二文字が亡兄の信仰の生命であつたと考え出し、有難かつた。

二月五日。講話。

「不思議な呼声が問題になつてきた時が、信の第一歩である」を中心として話をすすめた。

近頃、某君の自己批判が無意味であることも混じえて。

二月八日。

勤行後、「信仰によつて明らかにされる罪惡觀」について話す。予としてはそれほど喜びもならぬが、我が身の浅間しさについては一点疑えぬという事。この我が身の暗黒を思う時、これに対しての呼声はいやでも受けずにおれぬのだという事。

酒に酔いしれたものが、酔態を何程自己批判して見ても、それも迷酔状態ではないかというような思いがある。

二月十三日。

某も今一歩お慈悲が分つてくれたならば、どのようにか自身も救われようものかと残念でならぬ。

結局云うことが上手になつてしまふ処が気の毒である。

二月十五日。

お慈悲の事をどう話してみても言葉が説明になつて、お慈悲そのものを話す事が出来ない感がある。でも言葉によつて伝える外に方法がないのだから、して見ようもない。

二月二十四日。

真宗の機の深信の今更ながら恐るべき聖訓である事に思ひいたる。

機の深信は、わが身の悪いのを気にするのではなくて、

如何なる場合にも我が身の悪いのに頭が下り、下るだけにお慈悲に浮かばせて貰える味わいであることが、如何にも説明しにくい。

二月二十五日。

二種深信の内、機の深信をおとしたのは、明らかに不具の信仰であり、それだと必ず狂信となり神かかりとなる。

三月五日。講話。

如来廻向の罪惡觀の味わいを話す。

十月三十日。

勤行後、歎異抄一条「ただ信心を要とすとすべし」を話す。

信心は如来廻向の信心である事、予等はこの混沌とした今の時代につけ、ただ御慈悲一つで要領をえしめられている事など話す。

十一月三日。

某等は、お慈悲もお慈悲なれど、それだけでは何処までも放縱になるかも知れぬとの不安を持つておつた。

これに対して「少しでもよくすると言ふな」と抑えた。

「思うばかりで実際には少しも出来ぬではないか」と誠めたのであった。

歎異抄十三条には「本願ばかり」などと云う輩は、まだ本願を疑う連中の言うことであるとあるではないかといつた。

その出来もしない癖に何処までも出来そうな事を云う。その罪悪人故哀れみ捨てぬとの大悲ではないかと言った。そう話しつつ第一話した私自身が、これは全く特別の業人を痛ませ給う特別の大悲でまします事を知らされたのである。

私は従来このお慈悲を知らされてみれば、少しは人らしい事が出来るようになるのではないかと考えていた。さりながら、人らしい事というが、ただ如来に導かれまいらせて、そのように通らせて頂いた外に何ものもない。

ここまで書いて、亡兄が歎異抄結文「聖人の仰せには善悪の二つ総してもて存知せざるなり云々」について語った事を思い出したのである。

特別の業人に対しての特別の大悲心。弘

「無上殊勝の願を建立し、希有の大仏誓を超発せり」道理、理屈でこのような事が説明出来るわけではない。

*

*

近角常音先生の生涯

常音先生が亡くなられて十幾年（昭和四十四年）であるうか。暑い八月を迎えた。何か耳底録を書けとのことであるが、私のこうして生きていること全体、信仰は云うに及ばず、心のこと体の健康、生活一切、先生の賜物なので、それは余りに深く大きな賜わりもので一寸書き様がない。

信仰に迷っていた長い間、昼も夜も自分の闇さばかりをいじくり、信仰の判らぬことを歎いてのみいたが、自分の心はどうもこうもならぬ、それだから憐れで捨てられぬのだ、との仏のお呼びかけ、私に何の縁もない赤の他人である仏に、目をかけられ、声をかけられた。この不思議の慈悲に抱き取られて以来、横着極る話であるが、自分の心がどうのこうのという自己批判などくだらぬことが判り、もうしなくなつた。吾が身全体が炭団で、つついて出るものは黒い粉、いじって果てしないもの、それについて離れ給わぬ仏の火、それだけが唯一の光なのである。炭団の一切を仏に打ち任せ、賜った念仏一つで生きているのである。

誠

十一月十一日。

過日は自分等は人間界中にも極めて少数しかない特殊の罪業人であることを目に見るうに思わされたのである。

この罪業人故、特別の大悲心をもって臨まれたお慈悲と承つては、最早それ以上お慈悲があるも無いも、そのような問題は飛んでしまふではないかと思わされたのである。

此方が特別の業人であるだけ更に幾倍加する哀れみをもつて向い給はざるを得ぬ。この御同情の不思議さに着目するのでなければ頂かせて貰う事が出来ぬ。

某が、自分の転換の主因は、誰も善悪ばかり云って自分に同情してくれるものは一人もなかったのに、先生ばかりは自分に同情して下さい、この同情が嬉しかったのだと。

十一月十四日。

某夫人、某師が「信を頂いたならば、出来るだけよいことをせねば」というから、その点が予と食い違い、そこをはっきり聞かせて貰わねば、と。

柳 瀬 留 治

いや、信仰々々というていたそれも忘れて、生活に打ち込めて来たこと、即ち心をいじくり、信仰をいじくったりせず、本当の凡夫になって生きられ救われた。そうでなければ既に気が狂って死んでいたことであろう。

我々は毎日空気を呼吸しながら尊い空気を忘れていた。常音先生は、信仰は仏の方のお仕事だ。ただ念仏の粥を啜って生きよと仰言つた。常音先生に授けた念仏を呼吸して生きていくことを全く忘れて呼吸している。それで常音先生は私にとって空気である。無尽蔵で無対価無償で、感謝も何物も求められぬ。この方にあるもの全部が炭団である。それを見抜いての丸貴い念仏、それは空気なのである。

私はその後実に五十年先生に賜った大氣に包まれ生かされて来ている。余りに大きく深いのでお札の申し様もなく、書き表しようもないのである。先生にそしたお札を申しても、彼土の先生はにこ／＼笑っていられることであろう。いつか、自分の炭団を判らせて頂き、火をつけて下された

った風であった。この表と裏、父となり母となつて我々の信仰開発に一生を投じて下された而先生であった。先生なき今日、猶も有縁より有縁へと先生の説かれる「お呆れなおいお慈悲」が燎原の火のように方々に燃え移り、或は燻りを発していることが思われる。

常音先生が死の直前に「死ぬのか、死ぬのは厭だなあ」と仰言つたそうである。先生は誠に凡夫の本音を吐いて下された。我々は常に頭では当然死ぬと思ひながら、今こう生きてゐる、それがいつまでも常住のような気がしてどうにもならない。これは自我執着であらう。執着の切れないまま死ぬのである。「死ぬのか、厭だなあ」と仰言つて先生が死なれ、橘地翁も「人事じやない、私が今死なねばならぬのだ、自分が死ぬとなると全く辛い」と言われたとか友人の柴崎もしきりに「無だ、虚無だ」と書いてゐる。近くは葦原雅亮師も死なれた。

無常といふことは概念でなく、自分のことになると大問題である。この世の何もかも儂く力になるものはない。先生が「死ぬのが厭だなあ」と仰言り、やがて口をモゴモゴさせて息を引き取られたとのことである。それが念仏だったとのことである。念仏は先生の遺産である。聖人はじめ唯念仏一つで生き、それ一つで息を引きとられたことである。『人生随想』より

歌集『断流』抄 (一)

筑紫野春草

他の歡喜を身の歡喜とし心より言祝ぎ得ざるものあり内に

やになり

人のためと力む所は鼻につけ無作を行ぜむ心あるらし

雪 仏

今日ありて明日なきいのち雪佛我や雪佛雪仏やわれ

あまのこをせむこと

五岳上人雪仙画讚

人の世のたのめなきさまや雪仏今日をかがやきて明日てふ日なし

ゆく雲のあととどめぬ無作自然清しとぞ君絶讃したる

ゆく雲のあとをとどめぬすがしさを求めて久しわがひぐらしに

愛欲も悲哀もなべて淡々と身に感ずなりわれ老いにけり

老いづくを四苦の一つにあげられし聖の教今ぞ諾ふ

歌集『遊林』抄 (二)

み名のまこと伝ふるまでぞ、み名をおきて末とほりたる何物やある

み名なくば、何にか依らむ、今日の今はかなき命たどたととして

疎遠の因いまだわかねどわが非ぞと思はねばならず、さびしくはあれど

老いたれどなほ遂げたくと願ふこといくつかありてはげめり今日も

童形の厩戸童子もろ掌合せ、ひざまづきませり赤き袴つけ

山の端ゆ出づる月光にもろ手合せ南無仏と稱へ居ますところか

歌集『断流』抄 (一)

筑紫野春草

他の歡喜を身の歡喜とし心より言祝ぎ得ざるものあり内に

やになり

人のためと力む所は鼻につけ無作を行ぜむ心あるらし

雪 仏

今日ありて明日なきいのち雪佛我や雪佛雪仏やわれ

あまのこをせむこと

五岳上人雪仙画讚

人の世のたのめなきさまや雪仏今日をかがやきて明日てふ日なし

ゆく雲のあととどめぬ無作自然清しとぞ君絶讃したる

ゆく雲のあとをとどめぬすがしさを求めて久しわがひぐらしに

愛欲も悲哀もなべて淡々と身に感ずなりわれ老いにけり

老いづくを四苦の一つにあげられし聖の教今ぞ諾ふ

あはれこの童形の皇子何人の作なる知らずただただ見呆く

聞く所を喜び且つは得るところを嘆ずるのみとその謙虚

有所得

たのみつつやすらぐものとはこりしはなべてはかなき有所得の見

これなりと握りしめたるわが真理なべてはかなき有所得の見

若

幾度か握りしめたるまことはや茗存茗亡の有所得の見

無所得の八木中道遠しとほし有所得見を今知らされて

生滅断常一異来去(外道の邪見、修得の邪見)

あはれあはれいまだ来らぬ明日をうれへ過ぎし昨日を悔ゆる愚かさ

去る者を追うならねども時折に思ひ見ゆなり親しかりし日

信ずとはいささかごとに腹立ちの起る醜き身と知ることぞ

聖人の老い

井上善右エ門

「末灯鈔」第八条のお手紙は、聖人が関東の門弟がたに浄土教の本義を明らかにするため、十三にわたる法門の名目について述べられたものですが、その最後に次の言葉が記されています。

……これは加様にしるし申したり。よく知れらん人にたづね申したまふべし……目も見えず候 何事もみな忘れて候ふ上に人にあきらかに申すべき身にもあらず候 よく／＼浄土の学生にとひ申したまふべし 空賢々々

閏三月三日

このお手紙に年号は記されていませんが、閏三月三日を大陽暦で調べると正嘉元年に当り、聖人八十五歳の年であることが解ります。「目も見えず候 何事もみな忘れて候ふ上に人にあきらかに申すべき身にもあらず候」とあるお言葉を押すると、そぞろそのお姿が偲ばれると共にそのときのお心が察しられるのです。老軀に堪えて門弟に法門の義について筆を執られた御心には如何なる思いがただようて

いたことでしよう。

凡そ仏学にいそしむには、先ず知性の働が必要であるのは当然のことであります。道理をただし、事の筋道を明らかにし、理解を深めることは学問には欠かせないからです。しかし仏学においては、それによって得る理解と知識が最終のものではありません。さらに生死の解決という人間に課された根本問題がその底にあります。その解決なくしては学は畢竟、無意味なものとなりましょう。『歎異抄』にはそのころがはつきりと示されています。

「学問せばいよいよ如来の御本意を知り悲願の広大の旨を存知して、いやしからん身にて往生はいかがななど危ぶまん人にも、本願には善悪浄穢なきおもむきを説き聞かせられ候はばこそ学生の甲斐にても候はめ」とあり、また「まことにこのことわりに迷ひはんべらん人は、いかにもいかにも学問して本願の旨を知るべきなり」と語られています。善導大師が「学仏大悲心」と帰三宝偈に誦された一句にも、

よくその心があらわれています。

今日われわれが親鸞聖人の著述を押見するとき、その学識の深広さに驚嘆するのです。叡山での二十年の勉強は容易なものでなかったことが察しられます。山を下り法然上人のみ教えに遇われて生死出づべき道の解決したとき、聖人の学識は一転して新しく蘇ったと云うべきでしょう。即ち浄土の真実を明かす深い学識として展開していったのであります。聖人の学は往生の大事と寸分も離れぬものであります。

しかし学知には記憶や知識に属する部分が含まれることも避けえませんが、そうした知性作用の部分は、なお此の世のものであります。「目も見えず候、何事もみな忘れて候ふ」と老いの聖人が申されているのは、此の世のものはこの世で終らざるを得ないことを如実に語っておられるありのままのお言葉です。もしこの世の学識を自己の総てとし自己の力と頼んでいる人がありとすれば、その老いの最後は如何に落莫たる淋しきでありましょうか。しかし聖人への淋しさはなかつたのです。真実浄土につながる正定聚のよろこびは消えも失せもせぬからです。であればこそいま淡々として老いの極まる己れを静かにながめておられるのです。

これについて私には忘れえぬ思出があります。学生の頃から可愛がって下さった甲斐和里子女史が九十五才にも近づかれて床につかれるようになった頃のことです。ある日私は等持院のお宅にお見舞しました。寢床から這い出て来られて机によりかかりながら話して下さったのです。

……井上さん、あんたはまだ若いから頭を頼りにしていなさるだろうが、人間の頭というものは頼りになりませんが、わたしのようになんな歳になると、忘れるわ忘れるわ、右から聞いた事が左へつつ抜けですわ。やがて親鸞聖人のお名前も忘れてしまうような気がする……だけど一つだけ不思議な事がある。このたび真実のお浄土に参らせていただくということだけが、だん／＼はつきりして来る。これは不思議ですな……。

つづいてどんなお話をしたかは覚えていませんが、この言葉だけははっきり残っています。学んで記憶している知識と往生の大事とは別のことであります。知識は此の世のもの、往生は常住の真実に攝め取られてこの身が定まること、だからたとえ知性は耄碌しても定まった身の上は変わりようがありません。ここに絶対の安心が開かれましよう。

「何事もみな忘れて候」と申されている聖人のお心にこの安堵がただよっていることが偲ばれます。

しかもなほ聖人が「よく知れらん人にたづね申すべし……

よく／＼浄土の学生に問ひ申したまふべし」と語られているところに、如何に学ぶことを大切にされたかが偲ばれるのです。学知の記憶ははかないものである。しかし学ぶことによつて本願の主旨をいたたく機縁が与えられることは重大である。人それぞれに應じて聞法の道は開かれ与えられています。決して学問のみが聞法の道でありませぬ。しかし学びの縁をもつ人は、いかにも／＼学問して本願の旨を知るべきです。いま聖人が知識のはかなさをその身に示されつつ、学道の精進を門弟に勧めておられるお言葉は、釈尊が「この世のことはすべて壞法である。放逸なることなく精進せよ」と申された最後のお言葉に通うものを深く感じるのであります。

六月六日、校了。



「良寛歌集」より抄出

心もよ言葉も遠くとどかねばはしなく御名を稱へこそすれ

問

良寛に辞世あるかと人間はば、南無阿彌陀仏といふと答へよ

草の庵に寝ても醒めても申すこと南無阿彌陀仏／＼

不可思議の彌陀の誓ひのなかりせば 何をこの世の思ひ出にせむ

おろかなる身こそなか／＼うれしけれ彌陀の誓にあふと思へば

われながらうれしくもあるか彌陀仏のいます御国に行くと思へば

慈光日誌抄

——小慈小悲もなき身にて——

『慈光』七月号が届く。恥ずかしげもなく、当然のこのように、まず掲載されている自分のものを熱心に読む。ついで「あとがき」をざっと読んで、一息つく。

巻頭の先生がたのものは後廻し。それもどうかすると、失礼することもある。(なんとというひどいことであろう)それは、毎朝配達される新聞にはヒドク熱心に目を通すのに、口では大事な御聖教といいながら、じつさいは後廻しにするのと全く同じ。

どこまでも不急の日常生活に振り廻わされて、「おのれが、おのれが」の無明我執の根性でいっぱい、まったく無慚無愧でございます。

ともあれ、それではあまりにも申訳ないと、全誌を通読、いや拝読させていただく。そして末尾の花田先生の「随感いろいろ」にいたって、巻頭の三先生の玉文と同じように心打たれる。「この世が夢と知らされた時、浄土のすがたが厳然と現われてくる。この世が確かだと思っている間は、

西元宗助

お浄土が夢としか思えない」とのお言葉をありがたくいただく。

また岩崎師の「無相師の御述懐より」も。殊に無相翁が、聖人の御信心の御心を二種深信と深くいただかれて、聖人晩年の有名な『自然法爾章』も、その末尾に附加されている左の御和讃二首、

よしあしの文字をもしらぬひとはみな

まことのこゝろなりけるを

善悪の字しりがほは、おほそらごとのかたちなり

是非知らず邪正もわかぬ この身なり

小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなり

をもつて結ばれていること、即ち「自分をオオソラゴトと感ずる廻向の信心によりて照らされた凡夫の自性、(それを)どこまでもはずしておられなぬというところが、聖人のありがたいところである」と、讃嘆していられるのは、さすがと深く教えられる。

尤も、この世において拝眉したよき師のおひとり白杵祖山師（足利義山和上の高弟で、足利浄円先生の師。福島政雄先生もその晩年、最も傾倒された師）の高著『自然法爾』（百首宛刊・品切れ）も亦、聖人の自然法爾章を拝読讃嘆し、最後に前掲の「よしあしの文字をもしらぬひとはみな」の御和讃二首を仰いで、この尊き御和讃をわが身にいただいてはじめて、漸く上来の自然法爾の世界の一端を、南無阿彌陀仏と信嘗しうるものであろうかという主旨のことを、つゝしみ深く謹述していただける。それはまことに甚深微妙である。

そう申せば、右の「自然法爾章」の頭初にある『正像未和讃』五十八首の末句の、

如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も 骨をくだきても謝すべし

のご和讃も、これを卒爾に拝誦すれば、たんなる法の喜びの和讃にすぎないであろう。いや、なかには恩徳強制のお寺さまのおさい銭集めに利用される虞のあるものと見るものもあろう。わたしはそれを耳にしている。

しかし、このご和讃を心して拝誦すれば、聖人の悲泣のおん声が奥底から聞こえてくるようである。われら愚悪の謗法の、度しがたきものを助け救わんがために、それこそ今現に「身を粉にし骨を砕いて」長載永劫にご苦勞し給う

法蔵菩薩の二つの誓願

花田正夫

佛法を学ぶのは、佛の願いを聞くことである。私共の勝手な願いを佛によってかなえることではない。そして佛の願いを聞く時、自己の姿が照らし出される。親鸞聖人が、「彌陀の五劫思惟の願をよくく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身にありけるをたすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ」と常に仰しゃったのは、御身を以ってその消息を明らかに語って下さったものである。

さて法蔵菩薩が、師仏の前に四十八の願いを述べられたあと、更に三つの誓願を表白されている。その第一は、

超世の願

世を超えるとは、世間は四苦八苦満ちていて、そこから出られないのが私共の生活である。

幾山河越えざり行かば淋しきの果てなん国ぞ今日も旅行く

若いぬれば心のどかにありえんと思ひたりけりあやま

若山牧水

如来の大悲に対して、それを仰ぐことのない背恩忘恩のわが身。されば恩徳讃の内実は、まさしくは慚愧和讃であろう。ともあれ聖人が、悲喜の情ごもごもに、あの正像末和讃をご製作になられたことは、まちがいない。

それはともあれ、ちかごろ、つくづく思い知らされること。それはどこまでも高慢なわが身。聖人の「是非知らず邪正もわかぬこの身なり」の仰せ。「小慈小悲もなき身に名利に人師を好むなり」の仰せのままのわが身であることとてごさいます。

ここまで書いておりますところに、アメリカの加州フレスノの木村義文師から、次の悲報が届く。パークレー市の念仏者松浦しのぶ夫人（八十八才）が、去る七月四日ついに命終。そして七月八日午后四時からパークレー仏教会主催にて盛大な告別式法要が挙行された。松浦女史は、故松浦開教使の夫人であり、前ハワイ開教総長の今村寛猛師夫人の母堂にあたり、足利浄円先生の愛弟子。生涯聞法の「おばあちゃん」で皆から慕われた方である。著書に『悲願』がある。ここに記してそのご恩徳を謝し奉る。

花田正夫

窪田空穂

りなりき
等々、沢山歎きの歌もある。法蔵菩薩はこうした私共を見そなわして、それを超える願いをおこされたのである。又こうした苦の根本は、相對差別の二元對立の思想しか持たないで、智者も愚者も毒を持ち、有る者も無い者も愛いを持ち、善人は金の鎖、悪人は鉄の鎖に縛られると云う具合に、はてしなく苦が続いている。

そこに菩薩御自身が無上正偏道に到達せずばおかぬと願われ、而ももしそれが成就しなかつたら自分は佛のさとりをひらかないとお誓いを建てられたのである。御和讃に

生死の苦悔ほとりなし 久しく沈める我等をば

彌陀弘誓の船のみぞ 乗せてかならず渡しける

と聖人が随喜せられて、私共に呼びかけて下さるのである。又、道には往還の意味がある。山に入って山を出るよいうに、法蔵菩薩は世を超えられると共に世に還って下さって、私共の手を取って下さるのである。ここまでおいで

若
み続けているうちに、第三章の「煩惱具足の凡夫はいずれの行にても生死をはなることあるべからざるを憐みたまいて願をおこし給う本意悪人成仏のため云々」の一句に、限りない大悲は自分のうえに注がれていると気付き、念仏に帰入せられたのであった。

次に、Nさんは苦しい時東京に出て、救世軍の人達が街頭に立って神の愛を伝えてくれるの感激し、自分の収入の幾割かを献金し続けて還暦を迎えた。そして自分に近づく信者の人達が金銭を求めているのを知り、献金によって信者を捐ねていたと気付き、大きなショックを受けて床につく始末であった。そこへ洗張り屋で念仏者であった浅井さんが伺うと、奥さんが呼びこんで「主人はこの年まで聖書を片手に活動したが、献金の空しさを知り、信仰心も破れ、病床に倒れている」と聞き、同情のあまり近角常観先生のもとに走り、事の次第を申し上げると、先生は両眼に一杯涙をたたえて「それはNさんは可愛そうだ！長年の信心は崩れ、つれ添うた奥様からも呆れられては立つ瀬もあるまい！」とのお答えであった。浅井さんは早速Nさんの家を訪ね、ありのままに近角先生のお心を伝えようと、病室の襖をすこし開けてNさんが「わたしのために念仏者の近角さんが涙を流して下さったか？」とNさんも涙を浮かべて話された。その後数日して浅井さんが伺うと、Nさんが是非

なくここまで来て下さるのである。

大施主の願

第二に、自分は尽末来際かけて大きな施主となつて、あらゆる貧しく苦しめる者を救い遂げずば、正覚を取らない、と御いのちをかけての願いである。

さて貧しいことで、物の貧しい人と、心の貧しい人があるが、菩薩は、特に心の貧しい者を悲憫されるのである。

というのも、物はいくら与えられても、慾望に限りのない私共は、底のない槽で、喉元すぎる時だけ喜んで、次から次へと不足々々となる。そこに、物よりも貪欲に苦しむ精神的救済を一番に願われるのである。所謂財施よりも

法施を恵んで下さるのである。それには七聖財を挙げられている。信・戒・慚・愧・聞・捨・慧である。私共が信ずることが出来ない時は孤独に沈む。又生活が乱れると我人

共に苦しむ。そこに我身の程を知り、自ら愧じると共に、他の人々にも自分と同じ過ちを繰返さないように勧める。そして心を開いて万人から学び、併もそれに執着せず、医師が病人が医師の手から離れる様に努力するのである。

それには正しい智慧を持って疑心暗鬼のないようにせねばならぬ。そうしたことの出来る力を与えたいと願われ、それによって心の貧しい者をあまねく満ち足りるようにしたいと願われたのである。

若
遭いたくないとこのことで病室に招かれた。Nさんは開口一番、「仏教育の近角師がそんな温い心があるのだから、聖書のどこかに同じところがあると信じ、幾度も読み続けたがとうとう見出せなかった。矢張り自分も念仏より外ないと知った」と云って念仏していた。ここにも心の真に貧しさを知ると共に大施主の大悲に心がひらけたのであった。

名声超十方の願

御名のまことが十方の人々に聞こえるようにしたいとの願いである。またたとえ耳に聞えても、猫に小判であつてはその甲斐がない。そこに身につけてしまふようにしたいもしそれが出来ないならば仏とは成るまいと誓われたのである。

さすが聖徳太子が、日本は大乗相応の地と言われたように、日本人にして念仏を知らない者は、生れて間もない嬰兒をのぞいては一人もあるまい。それ程に行きわたつていくが、その真意を知る人は尠ない。そこに仏は、種々に善巧されて、繰り返しまき返し呼びかけて、点滴が岩をも穿つように、限りない慈悲を注いで下さるのである。

これは卑近な例であるが、数年前九州大学の心療内科の治療例を放送された。幼い子が歩けなくなつてあちらこちらと医師を尋ねたが、何処も悪くないとこのことで、とうとう心療内科を訪れた。そこでも別に悪いところが見つから

さて、これを聞いても、自分が貧しい者であると知らないならば他人事と聞き流してしまふ。私の信友の林田英夫さんは、非常に頭の優れた人であつたが、継母継子問題で苦しみ、或は運動により、或は音楽によつて心を明るく和らげたいと努めたが徹底せず、キリスト教を開いたが、敵を愛するどころか、生みの父母をさえ憎みのろうという始末であつた。牧師さんにそれを訴えたと神に祈れと勧められたが、親をさえ呪うような心では愛の神を思い出すことも出来ず、遂に酒で苦しさを誤間かすようになった。

その時、同窓の川畑愛義さんの誘いで仏教寮に入った。朝晩に揃つて仏前に勤行していても林田さんは用事のないこととしていた。或朝のこと自分の部屋で煙草を吹かして居た時、フト勤行の音が耳に入った。そこに、この第二の誓い、**無我量劫**において大施主となつて衆の貧窮を救はずんば誓ひて正覚を成ぜず」の一句に驚きを立てた。それとこの誓ひもこちらが求めるからでもないのに、仏様が施し手となつて貧しき者を救わずには仏にはならぬとは、今迄に聞いたこともない絶対のまことであつた。貧窮とあるが、自分は最高学府に居ても、毎日を酒で誤間かすという哀れさ、自分こそ本当の貧乏人であると思ひ、これを救い遂げて下さるとあるからは、その仏の教を聞けば自分も救われると気付き、それから歎異抄を持つて山に入って毎日読

ないので、その子にお母さんの絵を描かすと、角の生えた姿を描いた。そこでこの子は母親にこだわりを持っていることが分り、母親に詳しく今日までの経過を聞いた。

その子は生れて別に何の異状もなかったが、次の子が出来て、それが病弱なのでそのことにかかりきっているうちに歩けなくなったのであった。今迄いつも抱いて貰った母が次の子ばかり抱いて、自分をかまわって貰えないのを淋しがり、歩かずに居るといやでも母が抱いてくれるので引き続き歩かずに居るうちに筋肉が弱ってきたことが分った。そこから看護婦に毎日マッサージをさせて、その間歌のように「〇ちゃんは病氣じゃないの、歩くことを忘れただけよ。早く思い出して優しいお母さんのところへ行きましょう……」と、その子が聞いていようが居るまいが、絶えず聞かされた。それから何週間かすぎた時、看護婦が見ていると独りでベッドの手摺を掴まえて立ち上ろうとしはじめた。もうこうなれば大丈夫なので程なく歩けるようになって母を呼ぶと「お母さん！」と叫んで母の懐に飛びこんで行ったとのことであった。

この子供こそ私自身であり、私の口に浮かんで下さるお念仏には法蔵菩薩の長い間の御苦勞のあらわれであると強く教えられたのである。

これと同時に慈光に照介した柳瀬留治先生の「私は石つ静かに私を見守っていられるのであった。

「先生、何と不思議なことですね。何という不思議なことでしょう。こちらがどう思おうと思まいと向う様は無関係でゆるがぬとお慈悲ノ」永い間「どうも私には判りませんと払いのけていた私は、始めて有難うございました」と申し上げた。誠に、信じも喜びも出来ぬ石ころの私である。唯念仏に運ばれてゆくだけである。」

或寺の坊守さんが腎臓病が悪化し、尿毒症になった。そこへお見舞すると、「私は永年寺に育ち、朝夕仏様に御給仕し、時に有難いお話、又は信仰書を繕いて喜んでいましたが、この病気で頭が駄目になり、聞いたことも、読んだこともすっかり忘れてしまい、今では仏様も思い出せません」と訴えられた。ところがその坊守さんの口から、お念仏だけがもれていましたのに驚き、「奥さんお念仏が出るではありませんか。そのお念仏様こそ仏様です。私共凡夫には仏様を知る力もないから、おことば、お念仏となつてここまで来て下さるので云々」と申し上げると、奥さんの顔がほころび、目には涙を浮かべられて、ありがとうございます、と申されるようになった。

むすび

三つのお誓いを大略申し上げたが、自分が相對生死の苦海から出られない、こころの負しき者であり、耳はあつて

ころ」の一文が思い併せられた。要点を再記しよう。

「私は長い間人生の光として求めていた信仰が、とても判る望みがなくなり、絶望に落ち入り、同僚間全くの孤独になり、行き先が真闇になり、居たたまれず、べそをかきかき常音先生の所へ行つた。その時先生は

「判らずともわしの言うことが聞えるであろう」と仰言る。私は「聞えませんが、言葉は聞えますが、お慈悲が聞えませんが、それで先生は、

「君はそういう尊いことが聞える耳だと今日まで思っていたのであろうが、言葉だけしか聞えない、我々の耳はそれが聞えるだけなんだ。」

この一言生れて初めて聞いた、そこで初めて自分の分際が目覚めたのである。「でも先生、そう聞きまして、も、信じることも喜ぶことも出来ません」と申すと先生は、「そうであろう。君の心は石なんだ。化石して自由を失い、信ずることも、喜ぶことも出来ない。それが石なんだよ」「君を石だとして取られた私は、信じることも、感謝も出来ないことは元々御承知の上のことなんだ。その自由が利かず、動けない石が、路傍で踏まれ蹴られて果てて行くのを憐れに可愛想で、仕て見ようがないので拾いあげてウンウン運んで下さるのだ……」

先生は膝のお手に合掌し、口の中でお念仏されながら、

も真実の言葉を聞く力もない龍耳啞の身であると、大悲に照らされて来るのである。鏡は鏡自身を写し得ないように、自分で自分を知ることの出来ない身を、私はかねて知ろしめされて、常に大悲を注いで下さるのである。南無陀彌陀仏、南無阿彌陀仏。

お念仏は、仏のお呼び声である。池山先生は、西岸上から呼びかけて下さる「一心正念直来」も六字、お念仏も六字である。お念仏はお呼び声であると申されたことも忘れ得ないことである。

白隠禪師ととんぼ

禪師が寺内を散歩していると、池から葡萄い出たとんぼのさなぎが羽化しようとして非常に難儀していた。禪師はこれをたすけて、羽根ものばしてやり、サア飛べと放すと、とんぼはすぐ落ちた。夜が明けて見ると蟻にたかられて残骸をさらしていた。

寺に出入りするお百姓にその話をせられると、私もまゝに失敗しました。とんぼが羽化する時難儀しているうちに体力がつくのです。との話であった。禪師はこれで、自分は弟手の世話をしすぎて、一人立ちの出来ぬ僧にしていたと慚愧せられた。

子



三伏の夏となりました。暑中御見舞申上げます。

さて八月は近角常音先生の御忌月に当りますので、先生の日記抄をいただき、柳瀬留治先生の先生を讃仰せられました一文を記載させていただきます。御晩年の先生の面影は忘れられぬものであります。先生のお歌によしあしは人にはあらん大悪の阿闍世われにはよしあしはなし

このころこれを阿闍世とのたまひて見捨てじといふ御慈悲なりしかは、念仏に帰入せられた頃のお喜びの歌と存じます。私の病中に御見舞下さって、信の上で気付いた第二の喜びであるとて、

常観言

またやりそない／＼それだからお呆れないお慈悲でないか 常音記
と短冊に書き残して下さいました。

この月に常観先生の懺悔録から「信仰の経

過」の一文をいただきました。仏法を身をもって御述べ下さった尊い記録であります。

井上先生の「聖人の老い」は、学問と信仰の問題を聖人が明らかにされたことをお知らせ下さいました。私自身八十になり物忘れが多くなるにつれ、聖人の御晩年の仰せは身してみてまいります。

西元先生の日誌抄に、白杵老師も自然法爾章の末尾の御和讃を大切にお味い下さっていと知らされ、襟を正されました。

先日誌友から、執筆下さる方々の住所をお知らせ下さいとの申出がありましたので次の方々の御住所を誌します。御質問がございましたら直接お願いします。

〒六五七

井上善吾門先生、神戸市灘区篠原北町三ノ九ノ二七〇

〒六〇六

西元宗助先生、京都市左京区下鴨藁倉町六八

〒六一五

神原徳章先生、京都市西京区山田開町 浄住寺

岩崎成章先生、川崎市川崎区旭町一ノ十四ノ十三

〒二一〇

柳瀬留治先生、東京都渋谷区代々木五―一

〒一五一

八月の例会は例年通り休ませていただきます。御諒承下さい。

定価 半年 八〇〇円(送共)
一年 一六〇〇円(送共)

名古屋市中南区駈上二丁目十四―二十九

編集・発行人 花田正夫

電話 八二局七〇三七番

印刷人 坂部光雄

名古屋市中南区駈上二丁目十四―二十九

発行所

慈光社

振替口座 名古屋 六一〇四七〇番

郵便番号 四五七

慈光 第三十六卷第八号 昭和五十九年 八月十五日発行 (毎月一回・十五日発行)
昭和二十四年 七月二十三日 第三種郵便物認可